HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	スターリンの大テロルとウズベキスタン共産党
Author(s)	須田, 将
Description	北海道中央ユーラシア研究会 第100回記念大会. 第1部 報告4. ISBN: 9784938637736
Relation	中央ユーラシア研究を拓く: 北海道中央ユーラシア研究会第100回記念. 北海道中央ユーラシア研究会編
Citation	スラブ・ユーラシア研究報告集, 5, 172-193
Issue Date	2012-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/51956
Type	departmental bulletin paper
File Information	SEP5_007.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

スラブ・ユーラシア研究報告集 5（2012 年 11 月）
『中央ユーラシア研究を拓く』172–193 頁

北海道中央ユーラシア研究会　第 100 回記念大会　第 1 部　報告 4

スターリンの大テロルとウズベキスタン共産党

須田　将

（北海道大学大学院文学研究科博士後期課程）

日　時：2012 年 7 月 14 日（土）16:10–17:00
場　所：北海道大学スラブ研究センター4 階大会議室
司会者：宇山智彦（北海道大学スラブ研究センター教授）
参加者：26 名

はじめに

本稿では、戦前のスターリン政権下のソ連で展開された政治エリート・知識人・一般市民の大量弾圧である大テロルに関して、ウズベキスタン共産党に対する弾圧の展開を中心に検討する。大テロルの発動や経過については既に多くの研究がなされてきたが、主にモスクワやレニングラード等、連邦の中心都市に関して検討がなされ、次いでロシア共和国の地方や、「民族地域」に関しては主にスラヴ系のウクライナの事例が併せて参照される程度であった。コンクェストの古典的研究もウズベキスタンを含む中央アジアの政治エリートの弾圧について触れているが[1]、資料的制約もあって専ら第三次モスクワ裁判公判でのロシアの「ブハーリン＝トロツキー派」の記述が中心であり、中央アジアにおける弾圧の過程や、連邦指導部の地方党組織への介入について詳しく検討しているわけではない。だが、中央アジアでのテロルの展開には、ロシアの都市部とは異なるソ連東方の「民族地域」ならではの特徴があり、多民族国家ソ連の維持・統合強化という問題に絡んで連邦指導部の政策にも一定の影響を与えたように思われる。とりわけウズベク・ソヴィエト社会主義共和国は、ロシア帝国周縁部の植民地トルキスタンから 1917 年革命で成立したロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国領内の自治共和国、および帝国の保護国から 1920 年革命で成立したホラズム・ブハラ両人民共和国を部分的に併せて新たに建国されたソ連邦構成主体の共和国であり、在地諸民族からの要職登用や共産党員の積極募集といった脱植民地的な政策がとられたとはいえ、在地のムスリム系諸民族と外来のヨーロッパ系住民との間では文化的差異や社会的格差に起因する反目は依然として大きかった。ソヴィエト政権の政策に対する反発は、都市とくに旧帝国総督府が置かれたタシュケントに集中したロシア人に対する、多数派のウズベク人（多くは農民）の民族的抵抗という様相も呈した。こうした事情から、政権内のウズベク人指導者たちに対しては、密かに分離独立を求める「民族主義

[1] Robert Conquest, *The Great Terror: Stalin's Purge of the Thirties* (London: Macmillan, 1973).

者」の疑いがかけられやすかったといえる。

このような地域的文脈を重視する観点に立って、本稿ではとくにウズベキスタン共産党指導部への弾圧に至った背景事情や連邦の中央＝地方関係も重視しながら、検討を試みる。

１. ウズベキスタン共産党に対する弾圧の要因

大テロルに関して、単にロシア政治の権威主義的伝統や、革命と内戦での流血を通じて政権を確立したボリシェヴィキの独裁志向に前提を求めるのには難がある。革命期のボリシェヴィキと社会革命党や在地諸民族の自治運動・反ソ組織との闘争は中央アジアでも熾烈であったが、とくに 1937–38 年に逮捕と殺害が突出した背景としては、全面的集団化に際した反発を乗り切った、大戦前のこの時期に固有の時代状況が大きかったといえる。

1920 年代末からの全面的集団化でのコルホーズ設立と「階級としてのクラークの清算」を通じた反抗的な農民の弾圧は全連邦的な現象であるが、中央アジアのムスリム系諸民族の抗議行動は外来のソヴィエト政権への民族的抵抗という様相を呈した。集団化以降の農業不振も、農村に残存したクラーク（富農）勢力および在地の党・国家機関内に潜む民族主義者の妨害によるものとして扱われることが多く、ソ連の地方社会・経済の苦境に対するスターリン指導部の責任を免じるような分かり易いスケープゴートが各民族共和国に用意された。

集団化は連邦全体で 1930 年に 200 万人規模が参加した騒乱に発展したが[2]、中央アジアでは「バイ（地主）」や「クラーク」とされた一部農民からの収奪が、ムスリム系在地諸民族の宗教的・文化的秩序に対する暴力的介入と時期的にほぼ重なってなされたので、ソヴィエト政権の「外来」性が際立った。また、ロシアの地方では警察や武装した役人が局所的な抵抗を比較的容易に抑えることができたのに対して、中央アジアのソ連国境地帯ではソヴィエト政権の掌握が弱く、しばしば武装集団による反乱が発生し、「バスマチ（匪賊）」と呼ばれたこうした集団と政権側との勢力差が比較的小さかったことから、不安的な情況が続いた。

集団化を進めるうえでは、農民をコルホーズに加入させる際に、農民に架空の農具やトラクター等を約束することもあれば（ザラフシャン地区）[3]、集会で「コルホーズへの加入登録は義務的であり、登録しない者は水を剥奪され、重税を課され、国家配給を断たれ、ウズベキスタンから追放される」といった脅迫がなされることもあった（フェルガナ地区）

[2] Lynn Viola, *Peasant Rebels under Stalin: Collectivization and the Culture of Peasant Resistance* (Oxford: Oxford University Press, 1996), p. 4.
[3] Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД. 1918–1939. Документы и материалы. Т. 3. Кн. 1. М., 2003. С. 254.

[4]。多くの農民が財産没収と迫害を恐れて逃亡したので、1930 年 2 月に中央アジア各共和国の指導部は、国境を越えようとする家族の家畜と全財産を没収することも含めた措置を求められた[5]。同年 3 月初めのスターリンによる「成功による幻惑」論文発表後、ウズベキスタンも含む諸地区での集団化での「行き過ぎ」や「行政的手法」が批判された結果、3 月から 7 月にかけてウズベキスタンの集団化率は 45.5%から 26.8%に減少した。だが、説得や間接的な圧力を用いることで 1931 年 3 月には 47.9%へ回復し、1932 年末には 74.9%の農家が集団化された[6]。

ウズベキスタンの農民の反発は 1930 年 2–3 月に沸点に達し、6 万 5 千人以上の農民が参加するソヴィエト政権に対する示威行動に発展した[7]。とくにフェルガナでは示威行動が蜂起に拡大する様相も見せ、2 月のマザール村での騒擾事件では、農民が集団化の説明集会で「我々は皆、貧民であり、クラーク、バイ、商人その他はいない」と述べ、反対を表明した。特に反対を声高に唱えていたシャイフが逮捕されると、村人は役所を襲って勾留された人々を解放し、周囲の村を巻き込んで集団化の撤回、コルホーズ登録リストの廃棄、逮捕者全員の釈放、選挙権被剥奪者の復権、旧方式学校の復活を求めた[8]。彼らは町へ向かい、そこではさらに多妻婚や未成年者の結婚を監視する市民登記所の廃止、イスラームの結婚儀式の復活、商業の合法化等のより広範な主張も訴え始めた[9]。この騒擾事件を鎮めるために、ファイズッラ・ホジャエフ共和国人民委員会議長らが派遣された。ホジャエフは村人を巧みに説得し、コルホーズへの加入は強制しないことを確約し、群衆を解散させた。

ホジャエフはブハラ革命の立役者で、内戦期の「バスマチ」反乱鎮圧でも功績が認められて 1924 年末のウズベク共和国建国後は同共和国人民委員会議長として活動していたが、ヒディルアリエフ・ウズベク共和国農業人民委員やサイドジャノフ・ザラフシャン州執行委員会書記ら土地・水利改革等の党路線に公然と反対した「18 人組」（1925 年）に加担したとして、1927 年に中央アジア局で譴責された後、同年のウズベキスタン共産党第 3 回党大会で自己批判を求められたほか、1929 年 2 月のウズベキスタン共産党第 4 回党大会でも批判を浴びていた[10]。しかし、ホジャエフは共和国政府の首班として、その後も連邦が推進する急進的政策を抑制して現地の実情との折り合いをつけさせようと努力し、終始慎重

[4] Трагедия среднеазиатского кишлака: коллективизация, раскулачивание, ссылка. 1929–1955 гг. Ташкент, 2006. Т. 1. С. 80.
[5] Трагедия среднеазиатского кишлака. Т. 2. С. 253.
[6] *Ибрагимова А.Ю.* Социалистическое переустройство сельского хозяйства Узбекистана // Очерки истории коллективизации сельского хозяйства в союзных республиках / Под ред. В.П. Данилова. М., 1963. С. 250
[7] Трагедия среднеазиатского кишлака. Т. 2. С. 240–241.
[8] Трагедия среднеазиатского кишлака. Т. 1. С. 84.
[9] Трагедия среднеазиатского кишлака. Т. 1. С. 113.
[10] *Вахабов М. Г.* Формирование узбекской социалистической нации. Ташкент, 1961. С. 465; Революцией призванные. Биографические очерки. Ташкент, 1987. С. 249.

に振る舞いながらも綿作拡大に関連して綿計画の達成は穀物の十分な輸出、潅漑建設資金の供出、中央アジアの輸送体系の拡充といったウズベキスタン側の「要求」を、モスクワがまず満たすかどうかにかかっていると論じた[11]。現地のソヴィエト政権には政策遂行の観点から綿作地の拡大に難色を示す人々もおり、綿作地の現状以上の拡大は「ほとんど論外」とウズベク共和国国家計画委員会議長シュールも主張した[12]。彼らは、綿作モノカルチャーに懐疑的であり、とくにホジャエフは綿加工業の確立を主張した[13]。

ウズベキスタンの農民は穀物栽培を制限される一方、北方からの穀物輸入が 1931 年以降に激減したため、「綿花は食べられない」と訴えた[14]。「クラークとバイは民族的利害を守っており、ショーヴィニスト的ロシア民族は彼ら［ウズベク人］に綿を作物として押し付けている」というデマも流布された[15]。1930 年にサマルカンドの党会合で演説したイクラモフ・ウズベキスタン共産党第一書記のもとにも、不満を持つウズベク人党員出席者から次のようなメモが届けられていた。「我々のウズベキザーツィアでは、ウズベク人が諸組織の指導者として座り、ウズベク人が御者であるような方法で進む。ある者は馬に乗り、他の者は運転席に座るが、仕事はロシア人によって指揮されている。これはウズベク化なのだろうか。これはロシア人による植民地化ではないのか」[16]。

加えて全面的集団化を進める農業指導員として、ロシアの都市労働者が「二万五千人組」として連邦各地へ派遣され、ウズベキスタンへも 1930 年から 31 年にかけて約 430 人が送り込まれた（1931 年初めにはさらに 400 人の増派も計画されたほか、共和国首都からも主にヨーロッパ系労働者が送られた）[17]。彼らは現地語を解さず、現地の農業に適した活動も行えず[18]、現地住民との新たな軋轢を生んだ。現地当局が「二万五千人組」の派遣について知らされていないことも多く、例えばナマンガンに送られた組員たちは、コルホーズ

---

[11] *Файзулла Ходжаев.* Хлопок // Революция и национальности. 1930 (6). С. 27–32.
[12] *Шур Н.* К контрольным цифрам Узбекистана на 1930/31 год // Революция и национальности. 1930 (6). С. 43.
[13] Некоторые вопросы второй пятилетки в Узбеистане // Революция и национальности. 1932 (5). С. 12.
[14] *Бакулов А.* Некотрые итоги сева первой весны пятилетки // Революция и национальности. 1933 (7). С. 21.
[15] *Петухов Р.* На подступах к полний ликвидации национальности // Революция и национальности. 1934 (2). С. 39.
[16] *Рысаков П.* Практика шовинизма и местного национализма // Революция и национальности. 1930 (8). С. 25–34.
[17] *Ибрагимова.* Социалистическое переустройство сельского хозяйства Узбекистана // Очерки истории коллективизации сельского хозяйства в союзных республиках / Под ред. В.П. Данилова. М., 1963. С. 232; Rustambek Shamsutdinov, Shodi Karimov. *O`zbekiston tarixidan materiallar (uchinchi kitob)* (Andijon, 2004), p. 387. またウズベキスタンの首都タシュケント等からも 253 人の労働者が地方農村へ送られた。
[18] サマルカンドに送られた「二万五千人組」の 1 人は、連邦中央が主導する運動への地方の温度差に対する不満を記して『イズヴェスチヤ』紙に寄稿した。彼らは宿舎を充てがわれ、貴重品であった茶葉や砂糖を支給され、映画鑑賞等の歓待も受けた。だが、彼は他の組員の到着まで待たされた挙句、12 日間のウズベク語講習を受講させられることに反対意見を記した。Lynne Viola, *The Best Sons of the Fatherland* (Oxford: Oxford University Press, 1987), p. 81.

で野宿を強いられた。こうした問題は1931年2月の中央アジア局で検討され、「二万五千人組」に対する地方の「ショーヴィニスト的、クラーク的、機会主義的」な態度が批判された。とくにウズベキスタン共産党中央委員会ではウズベク語を理解しない人々を選挙から排除する傾向があるという問題が検討され、かような「官僚主義的」態度に対して刑事罰を追及する指示が出された。結果的にウズベク共和国に派遣された139人がコルホーズで議長・副議長等の指導職に就き、地区組織には157人が選出された[19]。「二万五千人組」は2年近くに亘って社会主義の尖兵として農村を指導し、各地で「バイ経営」を摘発し、財産を押収して記録し、家畜が屠殺されぬよう監視したので、在地諸民族の反感は高まった。

ウズベク共和国での集団化は成功を収めたというには程遠く、期待されたような農村でのソヴィエト政権の掌握の強化や経済基盤の拡大もなされなかった。綿の計画は1935年に質の低い綿花の調達が認められて初めて達成されたが、集団化を経て作地面積はむしろ減少したと批判された[20]。各地で村ソヴィエトは計画で与えられた課題を無視し、各種問題が生じたが、多くの不首尾はあらゆる場所に潜む「階級敵」の仕業によるものとみなされた。

連邦指導部と党中央アジア局によって指揮された弾圧は波状的に襲った。1930年3–6月にカスィモフ元共和国最高裁判所長らウズベク共和国の法曹関係者ら約30人が「バスマチ」に寛容な態度を示したとされ、多くが銃殺判決を受けた。カスィモフは指導的ジャディード（改革派のイスラーム知識人）のウバイドゥッラ・ホジャエフの弟子であり、ムナッヴァル・カリを中心とする「ミッリイ・イスティクラル」に参加し、ソ連最高裁に対して「民族的自治の権利の侵害」を訴える書簡を送ったとされる[21]。また、1931年4月末にOGPU（合同国家保安部）の参与会は、分離独立を主張したとされる「ミッリイ・イッティハド」支持者とされた87人に関して、15人は銃殺刑、その他には懲役刑や指定都市からの追放を宣告した[22]。その多くは内戦期に「バスマチ」に加わるか、もしくは「バスマチ」指導者と連絡して反ソ武装闘争を組織したとされた。釈放された人物は親戚を含む50人に対して「政治的評価」を与え、彼らが外国の敵に通じて蜂起の機会を窺っている等といった情報を提供した[23]。OGPUは翌32年1–7月に中央アジアで73の「反革命バイ＝クラーク集団」に属する834人を逮捕した。ソ連国境では「クラーク＝バイ分子」が越境し、

[19] Shamsutdinov, Karimov, *O`zbekiston tarixidan materiallar* , pp. 386–387.
[20] 中央アジアの綿作地は、1913年の158万ヘクタールから、1931年には353万ヘクタールに増加したが、実際の綿花の収穫量は生産性の激減によって低迷し、1915年の113万トンに対して、1931年は107万トンに留まった。
[21] *Каманиян Р.* Против Касымова – против Касимовщины. Речь государственного обвинителя по делу судебных работников Узбекистана. Ташкент, 1931. С. 77.
[22] Shamsutdinov, Karimov, *O`zbekiston tarixidan materiallar*, p. 222.
[23] Shamsutdinov, Karimov, *O`zbekiston tarixidan materiallar,* pp. 322–325.

アフガニスタンや中国に数千家族が越境し、2 千家族近くが国境に滞留していると報告した[24]。

また、地方ソヴィエト機構の粛清が進められると共に、工場労働者を中心に「抜擢登用者」が新たに登用されていったが、こうした人物の資質も問題になった。1933 年末のある報告によれば、コーカンド市ソヴィエト議長には工場出身のウズベク人「抜擢登用者」が就けられていたが、同議長は文字が読めてもロシア語を理解せず、市ソヴィエト幹部会ではロシア語のみが使用されていたので議論を理解せず議長席にただ座わり、実際に会合を主宰していたのはロシア人の副議長であった[25]。より深刻であったのは、多くの「抜擢登用者」らが村に住む「階級敵」の摘発に熱意を示さなかったことであり、例えばマルギランでは、市ソヴィエト議長には村ソヴィエト出身の「抜擢登用者」が就けられていたが「社会主義財産の保護に向けた闘争と階級的警戒」が弱いため、いくつかのコルホーズでは 2 万ルーブルに上る多大な使い込みも発覚していたにも拘わらず見せしめ裁判を開かず、綿の調達の際にも 700 キロを「階級敵」に焼かれてしまっていたが偶発的事件として処理しようとした[26]。

1933 年にはスターリンの直接指示により、「反革命分子」に対する超法規的弾圧（即決裁判で銃殺刑を許可）の為のトロイカが設立され、中央アジアではジャディードら民族知識人に対する批判やイスラーム弾圧の指揮で信頼が寄せられていたウズベキスタンのイクラモフ第一書記が中央アジア局第一書記バーウマンと中央アジア担当の内務局長ピリャルと共に加えられた（トロイカは 1937–38 年の内務人民委員部による一般人を対象にした「大衆作戦」でも組織された）[27]。その後も「バイ分子の間での陰謀」がウズベキスタンの綿調達を滞らせているとみたモスクワは、現地の党中央委員会の緩慢な対応に不満を募らせ、介入を強めた。1934 年 11 月初め、中央アジアに派遣されたクィビシェフ・ソヴィエト監督委員会議長はスターリンとモロトフ宛てに電報を送り、銃殺刑承認も含めた政治小委員会の権限を、クィビシェフ、イクラモフ、ホジャエフの 3 人に付与するように求め、モス

[24] Shamsutdinov, Karimov, *O`zbekiston tarixidan materiallar,* pp. 336.
[25] ЦГА РУз, ф. Р-86, оп. 10, д. 84, л. 25.
[26] ЦГА РУз, ф. Р-86, оп. 10, д. 84, л. 28.
[27] РГАНИ, ф. 89, оп. 73, д. 45, л. 1. スターリンは 1937 年 7 月 11 日付の 1 回の政治局決定で、連邦各地で 8,400 人以上の「クラークや犯罪者」の銃殺と 14,700 人以上の追放を承認した。ウズベク共和国に関しては、イクラモフ第一書記、バルバエフ第三書記、ザグヴィズディン共和国内務人民委員によるトロイカ設立と「民族テロリスト」事案の検討を許可し、1,489 人の銃殺と 3,952 人の追放を承認した。РГАНИ, ф. 89 оп. 73, д. 50, лл. 1–2. 続いて、同月 30 日付の悪名高い内務人民委員部第 00047 号令では、ウズベク共和国に関して即銃殺すべき「第一範疇」に 750 人、収容所で懲役刑に処すべき「第二範疇」に 4 千人が指定された。第 00047 号令による「大衆作戦」は、1937 年 8 月から 1938 年 11 月まで約 15 ヶ月間続いた。ウズベキスタンでの逮捕者は 4 万 1 千人を超え、3 万 7 千人が裁判にかけられ、うち 6,920 人が銃殺されたと見積もられている。Репрессия, 1937–1938 годы. Документы и материалы. Выпуск 1. Ташкент, 2005. С. 8.

クワはこの要請を承認した[28]。1934 年には合同国家保安部が一般警察と統合されて改組された内務人民委員部が発足し、連邦全体での逮捕者数自体はほぼ半減して反革命罪での逮捕も 3 分の 1 に減少したが、他方で厳罰が適用される傾向がみられた。

同様に、一般党員の資質にも不信の目が向けられた。元来、ウズベキスタン共産党では在地民族の党員獲得が奨励されたので入党条件は緩かった。また、30 年代半ばの党粛清と党員証検査・交換キャンペーンの際の過程では、粛清が現地党組織によって進められ、その結果に不満を持った連邦中央は地方党指導者への不信を強めた。1932 年にフェルガナでは申請した 480 人中 479 人の入党が認められ、サマルカンドでは同 4751 人中、却下されたのは 7 人のみであった。このため必然的に「異分子」が党組織に紛れ込んでいるという見方が強まり、党粛清が課題となった。

1933 年 1 月の連邦の党中央委員会総会の決定を受けて、ウズベキスタン共産党中央委員会は各地の党委員会と初級組織の粛清と入党停止を決定した。同年 1 月 1 日から 10 月 1 日まで、党員数は共和国総計 6 万 4739 人から 1 万 6 千人減少し、4 分の 1 以上が「クラーク」として排除され、約 1 万人が自発的に党から去るか、名簿確認によって登録を抹消された。タシュケントでは党員は 1788 人（22.1%）、党員候補は 730 人（8.9%）が除名された[29]。

続いて 1935 年 5 月に各地に送付された連邦の党中央委員会の秘密書簡は、党員証・交換キャンペーンを通じて党機関に潜入した異分子の排除を求めた。これは事実上、逮捕を伴う粛清キャンペーンであり、タシュケント市では 7–10 月に行われた党員証検査を通じて[30]、党員・党員候補は 1937 年初頭までに 7686 人に減少した。同市の党員証検査では党の除名者の半数以上が、経済機関が集中しヨーロッパ系が多く住む元「新市街」に当たる 2 地区に含まれ、内訳は事務員が 520 人（68%）、労働者が 97 人（12.7%）、コルホーズ員が 18 人（12.4%）であった[31]。主に排斥されたのは元トロツキー派であり、彼らは産業停滞の格好のスケープゴートとなった。

タシュケント農機工場では「ファシストのバッジ」や、反ソ・反党文書が発見されたほか、「異分子」が施設を爆破しようとしたとされた。工業の急伸を牽引する役割を期待されたスタハーノフ運動では離脱者が相次いで停滞しており、タシュケント紡績コンビナートではスタハーノフ主義者の女性が徒党を組んで反ソ宣伝活動に従事し、運動を停滞させた

[28] Oleg Khlevniuk, *Master of the House: Stalin and His Inner Circle* (New Haven: Yale University Press, 2009), p. 124. 同月下旬にはトルクメン、タジク、クルグズ各共和国でも、同様にクィビシェフを含むトロイカに死刑権限が与えられた。
[29] Очерки истории Ташкентской городской партийной организации. Ташкент, 1976. С. 230–231.
[30] Очерки истории Ташкентской. С. 231.
[31] Очерки истории Ташкентской. С. 231.

廉で逮捕されてもいた[32]。粛清はウズベク共和国国家計画委員会副議長シャアブドゥラスロフにも及んだ。しかしながら、この党員証検査キャンペーンを連邦党指導部は、恩顧関係を維持しようとする地方の党幹部が粛清過程を掌握しているという問題を抱えているとみて、異分子の暴露を不十分と考えたようである。1935 年 11 月初めには、「面従腹背を目的に党内で昇進したトロツキー派を全く明らかにしなかった」としてクルグズスタンやクリミアの内務機関が批判された[33]。エジョーフ内務副人民委員の 1935 年 12 月の連邦の党中央委員会報告によれば、敵は党を内部から破壊しようとし、党員証の売買や贈与に関与しており、ウズベキスタンのヤッカボグでは、100 枚の党員証がコルホーズに対する報奨として手渡された[34]。タシュケントでは再度、1936 年 7–8 月に党員証検査が行われた結果、905 人が除名された[35]。

ウズベキスタンの党員・党員候補数は 1933 年の 81,612 人から 1936 年には 28,458 人に急減した（1937 年には 29,934 人）。1934–36 年の党粛清を経てウズベキスタン共産党の地区書記 113 人のうち再選者は 43 人（38%）に留まった。なお、ウズベク党委員会・諸組織の書記職におけるウズベク人の割合は、前回調査時の 303 人（31%）から 1937 年初めには 71 人（21%）に低下した[36]。タシュケント市でも、1934 年には 33.6%であった党員のウズベク人の比率が、1937 年初めには 27.7%に低下している[37]。これには首都のウズベク人党員が地方の管理のために共和国内各地に転属されていた状況も影響したであろうが、民族政策でのウズベク人登用の停滞ないし揺り戻しが進行していたことも要因であろう。企業では在地民族の労働者の割合が急減し、タシュケントの農機工場では 1935 年に 47%であったウズベク人労働者は 27%に減少し、服飾工場では 85%から 68%に減少した[38]。ウズベキスタン共産党の党員数は大テロル後の 1939 年に 35,087 人に増加したが、第二次世界大戦前には 1933 年の水準には戻らなかった[39]。こうした地方党組織のとりわけ在地民族党員に対する不信と、政権への忠誠が疑われる除名した元党員の増大が、大量弾圧の一つの誘因となったとみられる。

さらに、1935 年 1 月以降にスターリン憲法草案が公表されると、連邦の指導部は各地から伝えられた宗教勢力の活性化に危機感を強めた。信者たちは、各地でモスクの再開を求めて活動しており、サマルカンド市のムスリム住民は、カリーニンに宛てた集団書簡にお

[32] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 92, лл. 62, 87, 95.
[33] *Самуэльсон Л., Хаустов В*. Сталин, НКВД и репрессии 1936–1938 гг. М., 2009. С. 57.
[34] *Йорг Барберовски*. Сталинизм на Кавказе. М., 2010. С. 723.
[35] Очерки истории Ташкентской. С. 232.
[36] РГАПСИ, ф. 17, оп. 27, д. 298, л. 98.
[37] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 298, л. 41.
[38] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 92, лл. 62, 87, 95.
[39] T. H. Rigby, *Communist Party Membership in the USSR, 1917–1967* (Princeton: Princeton University Press, 1968), p. 229.

いて、彼らの街区モスクに対して同市当局が門、井戸、煉瓦、屋根を略奪し、果樹園を破壊したことを訴え、イスラーム迫害の停止とモスクの復旧を求めた。興味深いのは彼らの訴え方である。彼らは、キリスト教徒が住むのは市内の 2 街区に限られており僅かであるのにロシア正教会は手付かずのまま残される一方、同じ通りにあるモスクが破壊されたと指摘し、宗教弾圧における民族差別の疑いを示したうえで、ソヴィエト国家に忠誠を誓う平等な市民として権利を主張した。彼らの訴えによれば、「市民の宗教カルトに対する迫害は、法に基づきこれまで行われず、市民には人種や民族的特徴に拘わらず平等な権利が与えられてきたのであるが、これはどういうことか。新憲法草案の第 123 条と 124 条に基づき、このような差別がないことを事実とするならば、……こうした行動は違法であり、信者たちの宗教の侵害である」[40]。

また、スターリン憲法採択後には、外国に通じてソヴィエト政権打倒を狙っているとされるイスラーム組織の活発化も具体的に報告されるようになっていた。ウズベキスタンの内務機関は外国の敵に通じるとされた「宗教集団」を 12 組織逮捕していた。彼らは日本によって既に穀物が掌握されておりパンが消えているといった噂をモスクで流布し、反乱を画策したとされた。カザフ共和国からウズベク共和国に移管されたカラカルパクスタンでは、ある地区で信者 3–5 千人があるイシャーン（スーフィズムの導師）の葬儀に集まる等、宗教活動の活性化がみられ、別の地区ではムッラーと信者たちがアフガニスタン経由でドイツに書簡を送り、ソヴィエト政権打倒に支援を要請したと報告された[41]。日本やドイツによってソ連領土が奪われており、ソヴィエト政権は長くは持たないと宣伝し回っているとされた「民族主義」組織も 11 組織逮捕されていた。

このほか、戦闘的無神論者同盟の 1936 年の報告によれば、タシケント旧市街では大半の女性が、覆いを被って通りを歩いており、旧市街のバザールでは、モスクの建物を転換したソヴィエト学校に市内各所から信者が通って礼拝していた。また、このバザールでは、イシャーン 2 人が、スーフィー詩人マシュラブらの詩を人々に詠んで聞かせては「他の民族の労働者に対するウズベク人の民族的な敵意を喚起」しているとみられた。マシュラブの詩の「いつか背教者の手中に我々の国が渡る日がくるだろう」といった内容の句に対して、人々は感極まって泣き叫び、「マシュラブはウズベキスタンについて予言した聖者だった」等と語ってイシャーンらに金銭を与えていた[42]。

以上のように、スターリンの政策の結果、集団化に苦しめられた農民、悪辣な労働環境に置かれた労働者、民族知識人や専門家、宗教勢力、非合法化された政党の党員等、あらゆる人々の不満が社会全体で燻っていた。ファイズッラ・ホジャエフやイクラモフらはそ

[40] РГАСПИ, ф. 5263, оп. 1, д. 50, л. 17.
[41] РГАСПИ, ф. 17 оп. 27, д. 85, л. 96.
[42] РГАСПИ, ф. 5263, оп. 1, д. 50, л. 181об.

うした不満を意識していたからこそ、現地の利益を代表して連邦政府と現地住民の間を取り持つ仲介者の役割を担おうとしたが、それゆえ連邦党指導部からの不信を招き易かった。ホジャエフは政府と党内で、連邦の指導部に対して利益誘導ともみえる行動をとり、連邦の第 17 回党大会でも、急進的なホラズム灌漑開発を提唱し、ホラズムへの鉄道建設と、道路輸送用に貨物トラック数百両の供出を求めた。しかし、同大会で示された議論の方向性は、ロシアの都市・工業地域の重点的発展のために農業地域を専ら原料供給地として従属的役割を課すもので、共和国や地方の代表者による地元利害の推進の試みは軽視された[43]。タイヒマンが明らかにしたように、スターリンのウズベキスタン党指導部との通信は 30 年代初めから専ら綿の問題や綿作農家の集団化に関わるものに次第に限定されるようになった[44]。非現実的な生産計画や数値目標の達成を求められた党指導者は、もしそれを達成できなければ厳しく責任を追及されたため、成果について虚偽的な報告を行うようになった。他方、多くの農民は生き延びるために窃盗・横領を繰り返し、地下経済が発達したため、「敵」が社会に遍在し妨害工作を行なっているという見方が広まった。

スターリンと彼の側近にとっては、こうした問題の責任が現地党指導部にあり、その責任追及がなされるべきであることは明らかであった。1937 年 2–3 月の連邦党中央委員会総会によって強められた警戒のキャンペーンによって、上級職者の部下やライバルによる批判が活性化され、地元の政治的権威、上級職者が「反革命主義者」「トロツキスト」「スパイ」等として非難され、下級職の人々の昇進の道が開かれた。社会主義が勝利し「階級敵」が打破されたという第 17 回党大会での論理の拡張によって、「階級敵」は「人民の敵」という用語に取って替わった。

２．中央アジアの民族エリート弾圧の契機

中央アジアの民族党・共和国政府の政治エリートの大量弾圧の直接的な契機となったのは、1937 年 5 月半ばのトゥラル・ルスクロフの逮捕であったと思われる。彼の取り調べの際の供述調書は、尋問する側の見立てた筋書きに沿って、尋問者側の表現を用いて「自白」として構成したものであり、テュルク・タタール諸民族に対して「隷属化、貧困、血まみれの大虐殺」を準備し、「実際にはソ連領で自由に暮らす」諸民族を日本・ドイツに売り渡そうとした等とルスクロフが「自白」し、自らを「祖国の裏切り者」と呼ぶ異様な内容と

[43] E. A. Rees, “Republican and Regional Leaders at the XVII Party Congress in 1934,” in E. A. Rees, ed., *Centre-Local Relations in the Stalinist State, 1928–1941* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2002), p. 87.

[44] イクラモフはウズベキスタンの工業の発展のためにオルジョニキゼに陳情したが侮辱され、諍い好きだ等として非難された。1936 年にイクラモフが休暇願いを提出したところ、これに対して、スターリンは怒りを込めて「なぜ休暇か？ 綿についてはどうするのだ？」と書き残した。Christian Teichman, “Canals, Cotton, and the Limits of De-colonization in Soviet Uzbekistan, 1924–1941,” *Central Asian Survey* 26, no. 4 (2007), p. 507.

なっている[45]。1930 年代に彼がとった反ソ活動とされるものは具体性を欠いており、農業の全面的集団化に際して飢餓を故意に引き起こした等といった荒唐無稽で根拠のない「自白」をさせて、連邦指導部の経済失政の責任をルスクロフに擦り付けていることにこの調書の特徴がある。もっとも、革命直後に民族主義組織に参加していた人々との過去の接触の供述については、時期や場所等の情報とともに民族知識人の人脈が具体的である。供述書によれば、1918 年末にタシュケントで活動したルスクロフは、1919–20 年に親族を介して指導的なジャディードのムナッヴァル・カリと知り合い、彼を通じてホジャエフも参加する「統一と進歩」の中央委員会に加わった。1920–21 年にモスクワの民族問題人民委員部に転任した後、パン・テュルク主義活動に一層傾倒するようになり、トルキスタン共産党に入党したムナッヴァル・カリ、ニザムッディン・ホジャエフ、トゥルスンホジャエフらと意見を交換、彼らから「統一と進歩」の地区委員会がトルキスタン全地区で設立され、バスマチと連絡がなされていると聞いたという。トゥルスンホジャエフから「統一と進歩」にバシキール人のゼキ・ワリディ・トガンが含まれることを伝えられたルスクロフは、実際に 1922 年にブハラでトガンと会ったという。しかし、1923 年に「統一と進歩」が非合法化されて以降、ルスクロフが反革命で共謀したと「自白」しているのは、ロシア共和国人民委員会議で職務上の接点があったルィコフらの「合同反対派」か、カザフ人・クルグズ人エリートにほぼ限られ、ウズベク人エリートに関してはホジャエフが独自に反ソ的な人脈を構築した旨を述べるだけで、テュルク系諸民族を糾合するような具体的な組織構造や実践について供述は全く引き出されていない。尋問者側もそれは虚構であることを承知しながら、過去に遡って非ボリシェヴィキ組織に関わった人脈を発掘し、一網打尽にするため「パン・イスラーム」ないし「パン・テュルク主義」による反ソ活動という単純明快な構図を描いたと思われる。尋問者側が関心を寄せたのは、想像上のパン・テュルク主義組織に具体性を与えることではなく、過去に反ソ的活動に関わったとされたあらゆる人物と彼らの非公式的な水面下での人脈であり、供述書にはホジャエフ（ウズベキスタン）、アタバエフやアタコフ（トルクメニスタン）、ホジャエフやガビドゥッリン（タタルスタン）、アブドゥラフマノフ（クルグズスタン）、クルンベトフ（カザフスタン中央執行委員会議長）等、革命期からの中央アジアのエリートの名前が数多く含まれており、これに直接目を通して「重要」と記したスターリンが、言及された人名を次々と丸で囲み、彼らの逮捕を事実上指示した。

このようにスターリンは、地方の民族エリートを含む弾圧の動向を追い、彼らの逮捕を直接指示ないし承認したが、民族地域におけるテロルの展開について統合的な計画や明確な展望は持っておらず、弾圧の範囲や、具体的に排除をどう進めるのかついては定まった

[45] *Хаустов, Самуэльсон.* Сталин, НКВД.

考えは持ち合わせていなかったと思われる。

３．ファイズッラ・ホジャエフの党指導部からの排除

1937–38 年のウズベク共和国の党指導者の大半の逮捕に至る弾圧は、在地の共産党組織内の議論の動向について「下から」寄せられた情報と、それを受けた「上から」のスターリンと側近らの指示・承認を通じて展開された。ルスクロフ逮捕後に開かれたウズベキスタン共産党第 7 回大会（1937 年 6 月）では、まだ共和国エリートの大量弾圧は発動されておらず、ルスクロフの供述でウズベキスタンの反ソ人脈の中心として名前が挙げられていたファイズッラ・ホジャエフが幹部会席に着いて開催された。重要なのは、35 年 11 月 7 日、ファイズッラの弟イバド・ホジャエフが自殺していたことである。ファイズッラは、自殺した弟の埋葬用に共産党墓地の最も美しいとされる場所を用意してやり、アラビア文字で名前を刻んだ豪奢な大理石の墓石を置き、鎖で囲み、そこにバラを植えさせた。葬儀には幾人かの党中央委員会委員も出席したが、ソヴィエト政権に反対して自殺した弟への格別の扱いに若いコムソモール員たちからは不満が聞かれたという[46]。

共産党内では、党員の自殺は自ら逮捕を免れ親族・知人を弾圧から免れさせる手段であり、抗議が込められたものとして調査された。イバド・ホジャエフの自殺については、既に 1936 年 6 月のウズベク共和国党中央委員会総会に際して調査がなされており、ウズベク党中央委員会書記ツェーヘルの報告によれば、イバドは自宅にブハラ・ソヴィエトの活動家クルバノフらを招き、そこでイクラモフ第一書記の暗殺について謀議したが、逮捕を察知して自殺した。この報告によって初めて弟に対する疑惑を知ったというファイズッラ・ホジャエフは、その後、イバドの自殺は個人的な理由によるものという独自資料を集めて 10 月にウズベク共和国内務人民委員ザグヴォズディンに送付した。これを受けたザグヴォズディンは、イバドが 1920 年からクルバノフと交流を持った形跡は認められるが、自宅で話し合ったのは 1 回のみで、イクラモフに対するテロ謀議は立証されないと返信したという[47]。このため、ウズベキスタン共産党第 7 回党大会で説明を求められたホジャエフは、反革命分子に利用されたことは許しがたいことであり、もしイバド本人が反革命分子であったならば家族関係を絶ち記憶から消し去るだろうが、そうした証拠はないと主張した[48]。

彼の弁明に対しては、党大会出席者からは「弟がこの事件に関わったことを確信できないと言うならば、テロの証明として［イクラモフの］殺人がなされたならば信じたというのか」、「［弟を］墓から掘り起こして座らせるのは無理だからな」といった野次が浴びせら

[46] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 98.
[47] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 185.
[48] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 187.

れ、雄弁で知られたホジャエフを動揺させた[49]。大会中、最も強い批判を展開したのはウズベク・コムソモール中央委員会書記のアルトゥコフであった。彼によれば、「1917 年当時に反革命分子であって、その最後まで反革命分子であり続けた」イバドらとの関係について、兄ファイズッラの説明は「全く不十分」であり、「階級的盲目」を認めているに等しく、知らなかったと言って済まされる問題ではない。アルトゥコフによれば、「大会の 2 日前にも 4 時間、中央委員会ビュローでこの問題が討議された」が、ファイズッラ・ホジャエフに対する疑いは晴れなかった[50]。

だが、彼の処遇に関して大会では予定調和的に議論が行われたわけではなかった。党内には依然としてホジャエフの支持者がおり、アルトゥコフの発言に対しては、それを遮るように割って入り、ホジャエフを擁護しようとする発言もあった。ベギゾフの見たところ、ファイズッラ・ホジャエフの個人的潔白に関して疑いはなく、アルトゥコフは混乱しているのではないか。「ファイズッラ・ホジャエフが、弟が民族主義テロリストであるかを知っていれば重要な問題だが、ファイズッラ・ホジャエフは［そのことを］知っていない。誰にとっても［自身の］弟が民族主義テロリストであったことを認めることが好ましくないように、それを認めることが人間として難しいのではないか」[51]。

ホジャエフは、数度の自己弁護の機会が与えられたが、最後の発言では、自身の生い立ちや「民族主義者」との関わりについて述べ、除名と逮捕が不可避であることを予期したかのような発言を行なっている。

> 「同志諸君、私は不幸なことにブハラに生まれ、不運なことにブハラ・アミールに対して反逆を煽動したジャディード組織に加わり、16 歳から革命活動を始めた。さらに不幸なことに、ブハラに生まれた私は、1917 年におよそ 18 歳の時に、青年ブハラ党指導者となった。私はブハラ・アミールに対する武装反乱に参加し、死刑宣告を下された。私はブハラでただ一人、あるいはトルキスタン全体で唯一、非党員としてソヴィエト政権に加わり、3–4 年でブハラ・アミールを打倒した。1920 年にブハラ革命が起きると、私はこの革命での活発な活動家となった。党が私をブハラのソヴィエト人民委員会議長・外務人民委員に任命したのは、私が 22 歳の時であった。私は困難な条件下で、必要な管理能力を欠いたまま、仕事を開始した。
>
> ブハラには親英と親ソの 2 つの潮流があった。ブハラでの仕事の最初の数ヶ月、以前の民族主義であり親英派に変化したサークルと闘争するはずであった私はそこに加わり、1921 年初めまでの 5–6 ヶ月、それに加わっていた。私は党の指令を受けて、

[49] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 188.
[50] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 533.
[51] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 533.

バスマチを積極的に組織した親英派のこの民族主義集団の分裂のため、政治的・大衆的宣伝活動を組織した。

この民族主義集団には既に幹部にムヒッディノフ[52]がおり、私たちは共に亡命者であったが、私自身は 1920 年まで様々な人々に関わりながらも彼とは関係は持たず、そのことは『クトゥルシ』や『ウチクン』等の新聞で証明できる。私はアミノフやアタホジャエフといった人々を、民族主義反革命の党内分派集団と対抗するうえで必要としたし、彼らが転向したと考え、個人的な連絡を保ち続けたのである。私は大会に対して、ボリシェヴィクとしては許されざる最も重大な政治的誤謬を犯したことを認めた。……クルバノフの事件に関して、私は何も知らないし、一切関わりのないことに関して何かを認めることはできない。……だが、そうしたこととは別に、私は［今回の疑惑から］教訓を引き出し、ウズベキスタンであろうと、アルハンゲリスクであろうと、モスクワであろうと、将来の仕事で政治的な結論を出すであろう」[53]

最後に、77 人の中央委員会委員候補が提示され、秘密投票で 65 人が選出されたが、ファイズッラ・ホジャエフは外された。ある党員の回想によれば、彼と同様、共和国財務人民委員アクバル・イスラモフ、農業人民委員ルスタム・イスラモフ、タシュケント市ソヴィエト議長アブドゥルハイ・タジエフ、ナマンガン州党委員会書記エルマトフも、候補者リストには載っていたが選出されなかったという[54]。なお、大会で中央委員会委員に選出されたのは 65 人であったが、逮捕され死刑となったことが確認できるのは 40 人で、実に 6 割が銃殺となった（不明 7 人）[55]。銃殺されたことが確認できる中央委員のうち外来諸民族は 15 人で、在地諸民族（タタール人を含む）が 25 人であったことを考えても、政治エリートに対するテロルがとくに民族的指標に基づくものでも、ウズベク人にとりわけ厳しいものであった訳ではないことは明らかである。だが、絶対数で少ない民族エリートの徹底弾圧は、歴史的な断絶をもたらした。

大会が 6 月 17 日に閉会すると、ホジャエフは精神的打撃を受けて 3 日間倒れていたが、21 日には仕事場に出向き、その晩の内に家族を連れて列車でモスクワへ向かった。だが、スターリンとの面会と直訴は拒絶された。24 日にイクラモフはスターリン宛に要請の電報を送り、26 日にはホジャエフの解任と逮捕をスターリンらが承認した。イクラモフによれば、ホジャエフは逮捕された民族主義者テロリストたち多数と連絡を維持し、「党員証検査の際に、彼らの一部が民族主義者として党から除名されたとき、彼らとの関係を絶たなか

[52] ブハラ出身のムスリム・コムニスト。タジク自治共和国人民委員会議議長で、サマルカンドやブハラの領有が認められず不満を表出させ、ファイズッラ・ホジャエフと対立した。
[53] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, л. 536.
[54] Majid Hasaniy, Islom Usmonov, *Oydin kunlar armoni* (Toshkent, 1997), pp. 61–62.
[55] 次の中央委員リストと各種人名事典を参照した。РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 85, лл. 621–623.

っただけではなく、彼らを守り、もしくは彼らは誤って党を除名されたのだとして復党を請願し、これ見よがしに彼らとの個人的関係を維持した」[56]。

ホジャエフが 20 年代後半から何度も公然と批判を浴びせられ、交流があったブハラの政治エリートや知識人が逮捕されていた状況を考えると、彼が共産党路線や連邦の指導部に対して不満と不安を募らせていたと考えるのが自然であろう。既にムミンジャン・アミノフとアタホジャ・ポラトホジャエフらホジャエフと親しかった人物が逮捕されており、彼らの 1937 年春の取り調べの供述からは、ホジャエフの民族主義的発言が明るみになっていた。そこでは、1935 年にファイズッラ・ホジャエフはフィトラトやイバドらが出席するなかで、「神よ、ウズベキスタンの独立と自立の日を見るために命を永らえ給え」と乾杯の辞を述べており、さらに別の機会には「ブハラ革命はあったのか。あった。そしてあり続ける。いつか近い内に、自由な発展と繁栄を保証する独立とテュルク諸民族の統合を我々が達成する日が来るだろう。そのためには闘わなくてはならない」と述べたとされた[57]。

逮捕許諾の請求を行ったイクラモフは 20 年代半ばから党指導者として、政府代表のホジャエフとは政策執行やイデオロギーを巡って立場上、牽制すべき職務上の関係にあり、ホジャエフを批判してきた。それにも関わらず、イクラモフがホジャエフの逮捕を中央に進言することをそれまで引き伸ばしていたとみられるのは、彼の排除がウズベキスタン共産党に破局をもたらし、ひいては自身にも追及が及ぶことを恐れていたからであろう。内田は、スターリン体制をこれまで支えてきた古参ボリシェヴィキの一部に、大量弾圧への「抵抗」とまではいかなににせよ、「ためらい」ないし「消極姿勢」があったという仮説を提示しているが、イクラモフによるホジャエフに対する態度はそうした「消極姿勢」に他ならない[58]。

イクラモフ自身、ホジャエフが批判されたウズベキスタン共産党第 4 回大会で、実父はドムラのイクラム・ハルフィではないのかと参加者から告発されてもおり、また、自身の住んでいたマハッラ（街区）からも家庭背景に関する密告書が送られていたことも確実であるが、マンジャラによって証拠不十分として却下されていた[59]。このような告発自体はめずらしくなかったが、結局のところ大衆による批判は共和国レベルの党指導者層の弾圧に動員されず、決定的な役割を果たさなかったようである。しかしながら、指導的な党員同士での批判を控えるこのようなウズベキスタン共産党指導部の態度は、スターリンと側近からは党員集団の庇い合い、隠蔽行為としてみられただろう。

---

[56] *Жуков Ю.* Иной Сталин. Политические реформы в СССР в 1933–1937 гг. М., 2003. С. 119.
[57] *Германов В.* Файзулла Ходжаев: Силуэт историка // Центральная Азия и Кавказ. 1997. № 10.
[58] 内田健二「大テロルの一側面 : 1937 年の地方指導部弾圧をめぐって」『大東法学』28 号、1997 年、197–198 頁。
[59] Shoshana Keller, *To Moscow, Not Mecca: The Soviet Campaign Against Islam in Central Asia* (1917–1941) (Westport, CT: Praeger, 2001), p. 109.

スターリニズムのいわば「縦軸」である党・国家機構の行政体系は、「横軸」の非公式的な人脈と組み合わせて運用されていた。スターリンは多くの独裁者同様、政治運営において人脈を重宝する一方、幹部要員の忠誠心や資質には強い猜疑心を持ち、「横軸」が「縦軸」を脅かしかねないとみた場合には、それを破壊しようとした。スターリンは連邦中央と「現地組織からのある程度の独立」をもつような地方指導部の関係を問題視し、恩顧関係に基づいた地方エリートの一体性によって、連邦中央と地方の関係が十分機能しなくなってしまっているという認識を示していた（「縁故主義（семейственность）」批判）[60]。スターリンは 1933 年にカザフスタン第一書記として赴任するミルゾヤンに対して、以前の活動地のアゼルバイジャンやウラルから親戚や友人を引き連れていくのを止めるように述べたことを明らかにし、各地の党指導者に警告を与えていた（ミルゾヤンは「人民の敵」を匿ったとして 1938 年に処刑された）。クルグズスタンでは 1937 年 1 月のクルグス州党委員会総会が連邦指導部の批判を受け、クルグス共産党第一書記ベロツキーの「敵」に対する「政治的盲目」と「縁故主義」を批判し、指導者の多くを更迭していた[61]。

４．ウスマン・ユスポフの「ボス礼賛（вождизм）批判」

イクラモフはタシュケント市に生まれ（隠されていたが、実際に父はムッラーで、兄はコーランの暗誦者であった）、モスクワのスヴェルドローフ大学で学び、若くしてウズベキスタン共産党の指導者として要職に就けられ異例の出世を遂げた。これに対して、フェルガナ盆地の農家出身のユスポフは、イクラモフと実年齢は 2 歳しか違わなかったが、叩き上げの実務家として頭角を現し、1929 年にはウズベキスタン共産党第 3 書記となった。

理由は明らかではないが、ユスポフはイクラモフら指導部と対立しており、モスクワ留学後の 1936 年には 29 年から務めていたウズベキスタン共産党中央委員会書記職を解任され、食品産業人民委員に就けられていたところであった。第 7 回党大会では、ユスポフは、中央委員会委員には選出せずに委員候補として残してほしいと奇妙な訴えを行なってもいる（この訴えに対しては、「委員候補にも要らないぞ」という不規則発言も飛んだ）。ユスポフは 1926 年入党当時から「ウズベキスタン共産党中央委員会」（実質的にはイクラモフ第一書記ら指導部を指すとみられる）への「ボス礼賛（вождизм）批判」を展開し、「反党的闘争」を続けており、未だに政治的誤謬を認めていないとしてヨーロッパ系党員の一人から批判された。指導部の「ボス礼賛」批判は、全連邦的に地方指導部の恩顧関係に対する批判と併せて連邦の 2–3 月総会前から強められており、ウズベキスタン共産党指導部とくにイクラモフにとって、ユスポフはモスクワから帰還したばかりの、油断ならないキャ

[60] 内田「大テロルの一側面」196 頁。
[61] 内田「大テロルの一側面」196–197 頁。

リア主義者として意識されたと思われる[62]。

ユスポフは、イクラモフが党書記となったタシュケント管区党書記職の後任でもあり、職務上、両者は対立しえた。イクラモフは総会において、ユスポフを「敵」として唾棄するわけではないのだとしながら、党が昇進させた「若く経験不足の党員」ユスポフの資質については過去に中央アジア局で処罰が検討されたことがあったと述べ、ユスポフが彼に対して「怨み」を抱いていることに何も「寛大」に振舞おうとはしているのではなく、ただ単純に「党の組織的観点から」対処しているのだと述べた。そして、もし党の総路線に抗うような誤謬がみられたならば自分が真先に破滅に追い込んでいるだろうと脅しを含めながら、ユスポフを「擁護」した。また、ユスポフが人民委員に就任してから、ウズベク共和国での生産性の低迷といった不祥事が明るみになったとして、一見評価するかのような発言もしている。だがその後、ウズベキスタン共産党中央委員会第 3 回総会までに両者の形勢は逆転し、イクラモフらウズベキスタン共産党旧指導部が一掃されるなかで、ユスポフが第一書記に就任し、彼の下でイクラモフやホジャエフらとの関係が深かったウズベキスタン共産党のエリートの弾圧が進んだ。

なお、ユスポフはスターリンと側近に昇進の成功を負っており、生涯を通じて忠実なスターリニストであり続けたようだが、1938 年頃には党統制委員会代表により彼自身「ボス礼賛」を報告され、第二次世界大戦中にも農業失政の責任を追及されそうになった。ユスポフは 44 年初めに、モスクワの組織局の会合で報告を行った際、国がかような重大な時期にあるというのに、軍と人民をズボン無しにしようというのかと叱責された。厳しい譴責処分が下されることを知ったユスポフは、内務人民委員ベリヤに相談して取り次いで貰い、スターリンに直訴している。スターリンはベリヤと共に訪れた彼らを個人的に出迎えて食事を共にし、ユスポフが壁時計に目をやっていることに気づくと、「同志ユスポフ、時計を持っていないのかね」と尋ね、自身の懐中時計を取り出してユスポフに与えたという。このエピソードが新聞記事に掲載されると、ユスポフの処分決定は即座に取り消されたという[63]。

スターリン死後、フルシチョーフの下でユスポフは閣僚会議議長に転任し同職を 1955 年まで務めたが、1954 年 12 月のウズベキスタン共産党中央委員会総会でニヤゾフ・ウズベキスタン共産党第一書記から腐敗と縁故主義を批判され、1937–38 年の粛清でユスポフは党を破壊し、経済を破綻させたとされた。それだけに留まらず、ユスポフはウズベク人で周囲を固めて反タジク的・反ロシア的態度をとり、ヨーロッパ人官僚を解任したという「民族主義的傾向」を批判され、タシュケントの紡績コンビナートでロシア人に替えてウズベク人女性を多数登用しようとし、「人民の友好」の促進に失敗したと批判された（ユス

[62] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 298, лл. 522–524.
[63] *Мухитдинов Н.* Река времениОт Сталина до Горбачева: Воспоминания. М., 1995. С. 106–107.

ポフ自身はロシア人の助力によってウズベク人の登用が可能であったのであって、ウズベク人の労働者の拡大はロシア人への感謝の公的な表明であると弁明した)。だが、ユスポフは厳しい弾圧がなされることは最早なく、ソフホーズ議長として年金生活者として余生を送った（1959 年死去)。こうしてみると、党員の資質に対する批判は続いたが、大テロルで死に追いやるような弾圧は、経済停滞や戦争の脅威によって危機感が強められた一時期の問題であったことは明らかである。

５．イクラモフの逮捕と大テロルの帰結

ウズベキスタン共産党第 7 回党大会とホジャエフの逮捕後、スターリンは電報の往復を通じてウズベキスタン共産党中央委員会の後任人事に関して逐一介入し、イクラモフを含むウズベキスタン共産党指導者たちへの苛立ちと不信を顕にした。8 月 2 日付電報では「人民委員会議議長としてバルタバエフを就けることは不可能である。彼も逮捕されたルスクロフ、ホジャノフ、アタバエフ、ファイズッラ・ホジャエフと関係していたからである。トラベコフを人民委員会議議長として薦めるように。ウズベキスタンでは、反ソ集団に対する闘いが行なわれておらず、イクラモフにはこのような分子によって囲まれていることが見えておらず、気付いていないように我々には思われる」[64]。イクラモフは直後にモスクワに召喚され、勾留中のホジャエフと対審させられたようである。さらに、スターリンが臨席した政治局会合でイクラモフの処分が諮られたが、その際の会合に出席したというフルシチョーフは、スターリンがイクラモフの「政治的信念、要員問題に対する態度、階級的嗅覚、業務の不十分な遂行」に関して問い質し、イクラモフはこれに自己批判的に答えたという。フルシチョーフによればスターリンは次のように語ったという。「確かに、イクラモフには多くの誤謬があるが、思うに、彼は正しい人物であり、ここでは正直に語った」。イクラモフはモスクワでは直ちに逮捕はされず、スターリンは現地での弾圧の推移を鑑みて判断を同時点では保留したと思われ、定まった計画はなかったことが明らかである。だが、結局エジョーフやカガノーヴィチらがイクラモフの排除を主張し、書記局が彼の運命を決定する必要書類を作成した[65]。実際に彼はブハーリンと懇意であり、ブハーリンの親戚ゼリキナ[66]と結婚し、親族になっていた。イクラモフはモスクワでブハーリンのダー

[64] Лубянка. Сталин и главное управление госбезопасности НКВД (1937–1938). M., 2004. C. 297.
[65] *Мухитдинов*. Река времени. С. 137.
[66] ゼリキナは 1923 年 10–11 月にトロツキー派の綱領を支持したことがあるとウズベキスタン共産党第 7 回党大会で公言していた。これは率直に過去の行動を認めたものであったが、文字通り致命的であった。だが、党大会の時点では、夫の第一書記イクラモフに遠慮してだろうが、ゼリキナをとくに追及する声は上がらなかった。ゼリキナは 1925–26 年にはすでにトロツキー派とブハーリン派に対して反対する宣伝に従事していたと党大会で弁明もしているが、イクラモフ夫妻がブハーリン夫妻と親密な家族づきあいがあったことは周知であったと思われる。この他、農業人民副委員として灌漑や

チャかアパートに泊まった。他方、ブハーリンは時々ウズベキスタンを訪問すると、イクラモフのアパートで数週間過ごしていた。

ウズベキスタン共産党中央委員会第 3 回総会（1937 年 9 月）では、逮捕者が続出して中央委員会ビュローが瓦解していたことから、イクラモフに同行して連邦から派遣されたアンドレーエフの指導下に組織問題が検討された。イクラモフは先の党大会で自己批判するなかでトロツキーをかつて支持したことを公言していた妻ゼルキナに対する批判を避け、メンシェヴィキや社会革命党等ほぼ外来民族で固められていた反対派との闘争は行ったが、「ミッリイ・イッティハド」等の在地民族の民族主義組織に関して隠蔽を試み、さらには国家を越えて侵入する「バスマチ」や「クラーク」の情報を得ておりながら対処を怠ったとして、主にウズベク人の新進幹部によって批判された。イクラモフ発言に引き続き、12 人が彼を批判する発言を行い、イクラモフは信用できないとして解任を求めた。うち 10 人はウズベク人であった。イクラモフは、1918 年にチャガタイ談話会を含む様々な反革命組織に参加し、1923–24 年にトロツキー派に加わり、「ミッリイ・イッティハド」と「統一と進歩」の活動を隠蔽したとされた。また、逮捕されたカリモフ、バルタバエフ、シルムハメドフらを擁護し続け、ホジャエフ批判を手控えたとしても非難された[67]。

アンドレーエフは 18 日付電報でアフンババエフ共和国最高会議議長[68]が、イクラモフとツェーヘルがアンディポフと会合を持っていたという「重要な事実」を述べたことをモスクワに伝えた。アフンババエフはまた、「バルタバエフ、ツェーヘル、カリモフ、シルムハメドフ、イルマトフ、タジエフ、イスラモフといった近しい人々の反ソ組織におけるイクラモフの監督的役割について証拠を示した」[69]。こうした現地の党指導部再編の指揮をとるアンドレーエフとスターリンの電信の往復の過程で、イクラモフの逮捕と、後任の候補選定が進んでいった。スターリンらは総会での党員の議論の推移を重視し、逮捕後の処遇は現場のアンドレーエフに任せており、後継候補について事前に明確な指示はしていなかった。9 月 19 日付のスターリンとモロトフ連名の書簡では、次のように指示を与えている。「もし総会がイクラモフの逮捕を要請するなら、彼を逮捕してよい。もしそうでなければ当面、彼を書記から解任し連邦共産党中央委員会の処分に任せるに留めてもよい。その後の運命については貴官のモスクワ帰還後に決定してよい」。「活動家の第一候補はセギズバエフなのか。トラベコフとは何者なのか。誰が人民委員会議議長となるのか。誰がウズベ

養蚕業における破壊工作者を暴露することが遅れたという責任を認めた。

[67] РГАСПИ, ф. 73, оп. 2, д. 19, л. 34.

[68] 1885 年フェルガナ州マルギラン郡の村で貧農の家庭に生まれる。1921 年入党。1943 年 2 月死去。1916 年、マルギランでの暴動に積極的に参加。逮捕された経験あり。1917 年以来、マルギランで村の議長などを務める。フェルガナ地方における内戦に参加、赤軍やマルギランのコシチ同盟議長、反バスマチ闘争に積極的に参加。1925 年 2 月、ウズベキスタン共産党中央委員会・ウズベキスタン共産党局員に選出。ウズベキスタン中央執行委員会議長、ウズベク共和国最高会議議長に選出。

[69] РГАСПИ, ф. 73, оп. 2, д. 19, л. 38.

キスタン中央委員会第一書記となるのか」[70]。派遣されたアンドレーエフは総会での議論の推移を慎重に見守り、終了とともにイクラモフの逮捕を実行すべき旨をスターリンに具申し裁可を求めた[71]。

アンドレーエフは、総会中に発言者や候補者に直接会い、スターリンに人物評価を送っている。セギズバエフについては、クラーク出身であり、逮捕されたムミノフ＝モハモド、トゥルスンホジャエフ、ミルザラフメトフらとの関係が 1924 年からあったとされた。「トラベコフは政治的にも業務上も管理者としてふさわしくなく、態度が悪いので、人民委員会議副議長として残しておいたほうがよい。第一書記候補には、セギズバエフが駄目ならばリザエフ［アクマルアバド地区書記］が有能で、若いウズベク人民の間では最も目を引く人物である。第三書記には、マスクモフ［ベフブーディー地区委員会書記］か、アブドゥカリモフ［ザアミン地区書記］がよい。人民委員会議議長にはユスポフ現食品工業人民委員、あるいはカリモフ［カガノーヴィチ地区書記］を候補にあげることができる。「彼ら全員は総会でうまく立ち回り、きちんとした印象を残していた」[72]。20 日付けの電報で、総会は全会一致でイクラモフの逮捕を要請し、イクラモフは逮捕された。総会を指導すべき在地の共産党幹部会員が残されていないなかで、第二書記としてモスクワから派遣されたヤコヴレフが承認され、1 週間内で第一書記をめぐる総会招集を決定した。第一書記の選出問題はすぐに解決はできなかったが、結果的にウスマン・ユスポフが選ばれ、連邦政治局は慣例に反してユスポフをモスクワに召喚し査問することなく承認した。これはユスポフが労組の指導職にあった際にはスターリン側近のカガノーヴィチ、また食品工業人民委員であった際にはミコヤンに接し覚えられていたからであり、モスクワの監視の行き届くと思われた人脈が重視されたからであった。1937 年 9 月 29 日には、ウズベキスタン共産党中央委員会提案の新ビュローをモスクワの政治局が承認した。ユスポフ第一書記、ヤコヴレフ第二書記、トラクロフ第三書記、セギズバエフ人民委員会議議長、アフンババエフ中央執行委員会議長、リザエフその他が含まれた[73]。

ウズベキスタンでの大テロルに際しては、綿不作問題に代表される共和国の著しい経済・社会政策に関するスケープゴートが求められており、スターリンとモロトフ宛の 9 月 22 日付の電報で、綿収穫に問題が指摘されている。1936 年の農業はかつてない旱魃の影響を受けて一部の地域では飢饉も発生しており、テロル遂行の一因として農業失政が背景にあったことは確実である。アンドレーエフが観たところ、畑で作業しているのは女性や子供が大半で、男性は少なく、非常に多くの車両がガソリンやタイヤを欠いて輸送が滞っているなど、綿畑で敵がサボタージュと妨害を行なっている。このため、近日中にフェルガナ、

[70] Советское руководство. Переписка. 1928–1941. М., 1999. С. 373.
[71] Советское руководство. Переписка. С. 375.
[72] Советское руководство. Переписка. С. 374.
[73] РГАСПИ, ф. 17, оп. 3, д. 992, л. 23.

ブハラとタシュケントで 2–3 の見世物裁判を組織することを決めたと記している[74]。

総会後、共和国内各地で開かれた下級の党総会でも、イクラモフやホジャエフら旧指導部の批判が展開され、彼らとの個人的な関係を築き人脈が濃厚であったとされた地方指導者らが矢面に立たされた。10 月のサマルカンド市党委員会第 4 回総会では、中央アジア・ユダヤ人（ロマ人）の党員とみられる出席者コントロフが、民族会議で中央アジア・ユダヤ人を最も後進的な民族としてイクラモフが名指していたことを取り上げ（「後進民族」の文化向上を説いたであろう彼の議論の文脈を無視して）、指導的な職位に中央アジア・ユダヤ人やロマ人が一人もみられないのはイクラモフが民族主義者であったからだと、こじつけ以外の何物でもない非難を行い[75]、少数民族要員の登用の停滞のスケープゴートをイクラモフに求めた。同総会では党とソヴィエトの代表者の批判合戦が展開され、サマルカンド市党員会書記ハジメトフがイクラモフの私邸に招かれるなど直接庇護を受けていたとして市ソヴィエト議長ガフロフに告発され、また逆にハジメトフはガフロフ夫妻がホジャエフと個人的に親しかったとして激しく非難を応酬した[76]。こうして地方党組織指導部の瓦解が進んでいった。

６．結論

ウズベキスタン共産党第 7 回党大会と同中央委員会第 3 回総会でのテロルの展開の推移を検討すると、連邦中央が弾圧の対象範囲については民族エリート議論の動向に注目し、推移を監視していたことが明らかであり、彼らの「身内贔屓」と、共和国の経済不振の隠蔽行為に不信を抱いていたことがわかる。アンドレーエフは綿作不振の問題をスターリンに報告し、新たに就任したユスポフ第一書記もこの問題を中心に地方党書記の粛清を進め、38 年にスターリンのイニシアチヴで始められた党員の復党にも取り組むことになった。

1970–80 年代にかけて従来の全体主義論に沿ったソ連理解を批判した欧米の研究者は、敵に対する警戒と非妥協的態度を誇示する様々な組織による、集権化を掘り崩す遠心力に対処した、単一の計画によらない、状況に依存した、あまり制御されない過程として大テロルを描いた。「リビジョニスト」と総称されたかれらは、全体主義論によるイデオロギーの拘束力の過大視や、指導者に一方的に社会が服従させられているとの通念を排して、中央・地方指導部の対立、地方官僚と住民との対立等の問題に関心を向けた[77]。なかにはサーストンのように、テロルをスターリンのパニック的行動と住民の積極的支持の相互作用

[74] РГАСПИ, ф. 73, оп. 2, д. 19, л. 54.
[75] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 225, л. 64.
[76] РГАСПИ, ф. 17, оп. 27, д. 225, лл. 69, 74, 77.
[77] J. A. Getty, *Origins of the Great Purges: The Soviet Communist Party Reconsidered, 1933–1938* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985); J. A. Getty and R. T. Manning, eds., *Stalinist Terror: New Perspectives* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).

によるものとしてみる研究も現れた[78]。しかしながら、ペレストロイカ期以降に公開された文書館史料に基づく研究は、テロルが「上から」の統制された現象であったことを明らかにし、スターリン指導部の果たした主導的役割について明らかにした[79]。本稿もまた、大テロルはモスクワで発動され、党と国家機構を通じて制御されたものであることを明らかにしたが、広大な連邦の周縁部のエリートを標的とした弾圧を遂行するうえでは、スターリン指導部も現地事情を把握し、在地の党内議論の推移を見極める必要があり、テロルは（中央から派遣された党官僚も含めた）現地とのやりとりに基づくある種の「創造的な過程」であった。

[78] R. W. Thurston, *Life and Terror in Stalin's Russia, 1934–1941* (New Haven: Yale University Press, 1996).
[79] O.フレヴニューク（富田武訳）『スターリンの大テロル』岩波書店、1998 年、8 頁。